大和田 新さん（ラジオ福島 チーフアナウンサー）

とうほく彩発見

高校生から講演会の感想文

大人への叱咤激励

4月21日、福島県相馬市にある県立相馬東高校で講演する機会があった。満開の桃の花に季節外れの雪が降り積もる寒い日だった。被災地にある相馬東高で、私が講演してもいいのか当日まで悩んでいた。家を流され、家族を失い、東京電力福島第1原発の事故で、苦しい避難生活を余儀なくされている生徒の前で、私が震災を語る資格があるのだろうか。その気持ちは講演終了後も変わらなかった。1週間後、相馬東高から分厚い資料が送られてきた。中身は、私の講演を聞いての生徒からの感想文だった。130枚にも及ぶ感想文は全て手書きで、学年や名前もきちんと書き添えられていた。そこには、震災を乗り越え、前を向いて進もうとする福島の若者のたくましい現実があった。未来への希望を失いかけている私たち大人への、叱咤激励のメッセージに感じた。

「震災前、原釜（同市）に住んでいた。津波で全て失った。私も津波に流され30分泳いで屋根に登って助かった。思い出したくない経験だが、講演を聞いて震災を語り継いでいこうと思った」

「僕は津波を見た。原発の（水素爆発の）爆発音も聞いた。電気も水も食べる物もない、不自由な生活を思い出した。僕の夢は、福島県の食材を使っておいしい料理を作る料理人になって風評被害をぶっ飛ばす事」

「原発事故で自宅に帰れない。でも、いつまでも被災者と呼ばれたくない。少しずつ当たり前の生活が戻ってきたことに感謝して、経験したことを語りついでいく」

「私は中学3年の時に震災に遭った。住んでいたのは原発がある大熊町。震災の次の日には大熊町には誰もいなかった。それから2年1カ月、これまで1度も自宅に帰っていない。震災後半年でPTSD（心的外傷後ストレス障害）になり体調を崩し、体重も4キロ減り、腹痛に苦しんだ。大熊町は原発と共に生きてきた。小さい頃からリスクは感じていた。最近、地元に帰りたいというニュースが流れると、不信感が募る。高齢者は帰りたいかもしれないが、若者は帰りたいとは思っていない。私も結婚して子供を産んでも、大熊町には帰らない。大和田さんが言うように、福島県の復興・復旧を担うのが若者ならば、マスコミはもっと若者の声を聞くべきだ。行政や政治家の意見ばかりを扱うのではなく、私たちの思いや主張をちゃんと伝えてほしい」

「震災当日、私は磯部中学校の体育館で一晩過ごした。津波も上から見ていた。何も無くなってしまった磯部だが、私の心の中には、奇麗な想い出がたくさん残っている。震災を忘れず、苦しんでいる人の力になりたい。夢はカウンセラーか整体師」

「震災の話は聞きたくなかったが、でも講演を聴いて、将来の目標がはっきりした。保育士になって、子供たちに震災のことや、命の大切さをちゃんと伝えたいと思った」

「講演を聴いてあの頃を思い出し、鳥肌が立った。私の家は津波で流され、おばあちゃんがまだつかっていない。でも、悲しいのは自分だけじゃない。命あることに感謝して、涙をこらえて生きていく」

「生きたくても生きられなかった人の分まで生きて、自らの夢をかなえよう」

何度も読み返しているうちに、昨年3月1日の富岡高校の卒業式を思い出した。答辞で生徒会長の若林みのりさんは「人間のコントロールできない科学技術の発達によって、私たちは大切な故郷と母校を失った。しかし、天を恨まず、自らの運命を自らの力で切り開いて行くことを誓います」と述べた。失った物を数えて生きるより今あるものに感謝して生きる高校生の姿に、福島県の明るい未来を感じた。感想文は私の宝物になった。

おおわだ・あらた　神奈川県横須賀市出身。1977年ラジオ福島入社。編成局専任局長・チーフアナウンサー。納豆と豆腐が大好きで、阪神タイガースをこよなく愛する。趣味はギャンブル全般とギャルズウオッチング。「大和田新のラヂオ長屋」「月曜Monday（もんだい）夜はこれから」などを担当している。

TOUHOKU SAIHAKKEN